

様式C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21年 5月 18日現在

研究種目：基盤研究 (C)
研究期間：2006～2008年度
課題番号：18520076
研究課題名 (和文) 鎌倉時代経絵の研究
研究課題名 (英文) a study on the frontispieces of Sutra in Kamakura period
研究代表者
須藤 弘敏 (SUDO HIROTOSHI)
弘前大学・人文学部・教授
研究者番号：70124592

研究成果の概要：

鎌倉時代における経絵展開の状況全体を把握し、その中で二つの特徴的な傾向を見出した。とくに Cleveland 美術館と New York Public Library 所蔵の紺紙金字法華経扉絵が示す、中世東アジアにおける仏教美術の伝播と受容のあり方が注目され、南宋・高麗・日本それぞれの問題と相互関係について重要な情報が得られた。経絵は、小さなジャンルながらこうした複数の地域や時代にまたがる転写関係を最も良く映し出すものとして、美術史や仏教史の上できわめて重要な意義を持つことを明らかにし得た。

交付額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2006年度 | 1,900,000 | 0 | 1,900,000 |
| 2007年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 2008年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,200,000 | 390,000 | 3,590,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・芸術史

キーワード：写経、変相、東アジア

1. 研究開始当初の背景

経絵の研究が、主に日本および平安時代の枠でのみ行われてきたことを批判し、地域と時代を拡大した視点で考察しようとした。

2. 研究の目的

中世東アジアにおける日本仏教美術の特徴と意義を明らかにするため、その対象として経絵を選択し、全体の状況と重要な課題双方を明らかにすること。

3. 研究の方法

- (1) 既収集画像資料のデジタル化による情報の整理。
- (2) 文献等を援用した当時の東アジアにおける写経や版経の状況把握。
- (3) 主要な鎌倉時代、宋元時代、高麗時代の経絵作例について詳しい実地調査を行い、相互の比較研究。

4. 研究の成果

(1) 東アジア全体にわたる経絵研究という視点の確立。これは日本および韓国で初めての視点で、とくに韓国では経絵研究が盛んでありながら東アジアという枠組みで考察する傾向が少なかったため、韓国仏教美術史学会での講演や刊行論文についても大きな反響を得た。また、日本においても平安時代の経絵が終始自律的に展開しているかのような認識がされがちで、宋や高麗との関係については、単に外面的な影響関

係にとどまるというような理解がされがちだった。しかし、実際はむしろ本質的な部分についてまで東アジア各国間の影響関係は広く深いものがあったことを確かめ得た。

(2) (1)の成果をさらに具体的に以下に記述する。

13世紀における東アジア経絵の重要な作例である Cleveland 美術館と New York Public Library Spencer Collection の紺紙金字法華経法華経は、南宋の同種紺紙金字法華経經典変相（扉絵）を忠実に金銀泥絵として転写したもので、特に前者は細かな描写技法まで丁寧に写し取ったもので、十二世紀の外面的な宋本写しとは転写する意図がまったく異なっていることが明らかである。Cleveland 美術館本はすぐれた写経と扉絵を持つ紺紙金字法華経の優品だが、同館はこれを北宋時代として登録しており、一方韓国の研究者は高麗時代のものとして取りあげている。また、日本ではその存在すらほとんど知られていない。もう一つの Spencer Collection 本は Cleveland 本に酷似する画面で書風も似ているが、New York Public Library はこれを日本の鎌倉時代作として登録している。そして、これまでは両者ともに南宋は南宋でも版本の法華経扉絵と強い関係を持つと想定されてきた。

実際、栗棘庵蔵の南宋版本法華経の図様や個々のモチーフは上記二つの金字法華経扉絵と共通する部分がほとんどである。しかし、版本の法華経変相はその技巧上、描写が単純とならざるを得ず、樹木や衣装のグラデーションやぼかしなどの表現とは無

縁である。それに対して Cleveland 本は樹木の木肌や崖あるいは土坡の質感をあらわすのに、金泥に濃淡をつけたり筆触をいかすような方法をとっている。これは版本絵画の応用的表現とは到底考えられず、祖本が金銀泥絵でなければこれほどの精緻な描写を再現できるはずがない。また、Cleveland 本こそが南宋の紺紙金字法華経だとすることはできない。なぜなら Cleveland 本は次のような特徴から日本における写経だと判明しているからである。

経絵の形状の上で宋や高麗の経絵では幅広く取る天地の余白がきわめて狭くあらわされていること。見返し(扉絵・変相部分)の縦幅と本紙経文の界が一致するのが中国及び朝鮮写経の特徴だが、Cleveland 本は見返し部分が界よりずっと大きい幅をとっていることなどがあげられる。また、書風についても Cleveland 本は巻を開くにつれて大陸風の雄勁な書風や緊張感が弱まり、巻末では明確に日本の柔らかい書風があらわれていることなどがあげられる。

このように、南宋の版経ではなく写経を日本で転写したことが明らかとなった Cleveland 本法華経には大きな意義がある。第一に 12・13 世紀に制作された中国の金字経や銀字経はほとんど残っていないため、その忠実な転写本である本経は、失われた南宋時代の金銀泥経典変相を知るための最もすぐれた遺例である。次に、日本において異国風の経絵表現を行う場合、平安時代末のように単に目新しい表現、珍しい図様として転写する傾向が強く、宋や高麗の経絵が持つ経典変相としてのより深く重要な性格は認識されることが少なかった。それが、Cleveland 本では画面内の情報は

変更や増減を行うことなく、つとめて忠実に転写を行っている。こうした転写の姿勢は当然その価値と意義を十分認識したからこそ生まれたものであろう。なぜ、鎌倉時代になってそうした宋本認識が確立したのか、単に写経だけではなく日本における大陸の仏教美術受容の歴史における一大転換点とも言うべきこの現象はさらに詳細に検討されるべき問題である。

そして、それは一般的な傾向だったのかそれともきわめて個別的な事例だったのかも重要な問題である。当時の写経は現在考えるよりもはるかに重要な作善業で、単に信仰上の理由だけでなく、政治性を帯びた行為だったことも無視できない。鎌倉時代の日本は、あまたの善本やすぐれた装飾経に恵まれた状況にあった。にもかかわらず、なぜ南宋の金字法華経の転写が行われねばならなかったのかが問題である。それも物珍しい図様だから一応模倣してみようというレベルではない。明らかにきわめて積極的に南宋本を転写しなければならぬ理由が存在したはずである。

仮に Cleveland 本しか伝わっていないのであれば、これは単に珍しいケースで終わってしまう。ところが、これとそっくりの New York Public Library 本も伝来しているのである。こちらも書風、画風いずれも南宋の金字経を忠実に写そうとした紺紙金字法華経である。そして、報告者が精細に両者を比較検討した結果、いくらか画技が劣る Spencer 本が Cleveland 本を写した第二転写本なのではなく、どちらも同じ祖本に基づいた第一転写本であることが確認できたのである。

ということは、鎌倉時代に日本に伝来し

たきわめて貴重な南宋の紺紙金字法華経があつて、それ自体の持つ意義もしくはそれに付加された何らかの意義や権威が、これの転写を行わしめたということになる。その検討の詳細はここでは述べないが、この二点の金字法華経が持つ重要性は明らかになったと考える。

(3) こうして、本研究は鎌倉時代経絵の中に隠れていた大きな存在を明らかにし、それが持つ多方面に及ぶ重要な意義についても確認し、13世紀の日本が東アジアの文化をどういう形で受容し、そこにどういう意義を見出し、またそれをどう継承していったのかあるいはしなかったのかが浮かび上がらせることに成功した。これは、美術史という狭い枠にとどまらず、最近活発となった東アジア全体の歴史の中に日本を位置づけようとする人文科学全体の動向に沿う大きな成果とも言える。

さらに、Cleveland 美術館蔵の紺紙金字法華経については、アメリカや韓国の研究者によってこれまで南宋や高麗のものと認定されてきたわけだが、それらの考察の誤りを正し、正確な年代や地域の比定を確定させたことで、本研究は国際的な研究成果としても評価されてよい。

(4) 今後の課題は、東アジアを強く意識した中世日本の仏教美術のあり方をさらに幅広い視野と他地域の多くの作例で比較検討していく必要がある。そのためには何よりモノも文献情報も少ない中国宋元の写経を中心とした造形について積極的な研究を行うとともに、日本におけるこうした東アジア造形受容に関する他ジャンルの成果を

さらに詳しく研究し、より本質的な問題の把握につとめたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

① 須藤弘敏 「동아시아의 사경」 2007, 11 『불교미술사학』 5 (『佛教美術史學』 第 5 集, 韓国佛教美術史學會) pp.399 ~ 428
査読有

[学会発表] (計 1 件)

① 須藤弘敏 「東アジアの経絵」 2007, 4, 13 第9回韓国佛教美術史学会 (韓国通度寺聖寶博物館)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

須藤 弘敏 (SUDO HIROTOSHI)

弘前大学・人文学部・教授

研究者番号 : 70124592

(2) 研究分担者 なし
(3) 連携研究者 なし
